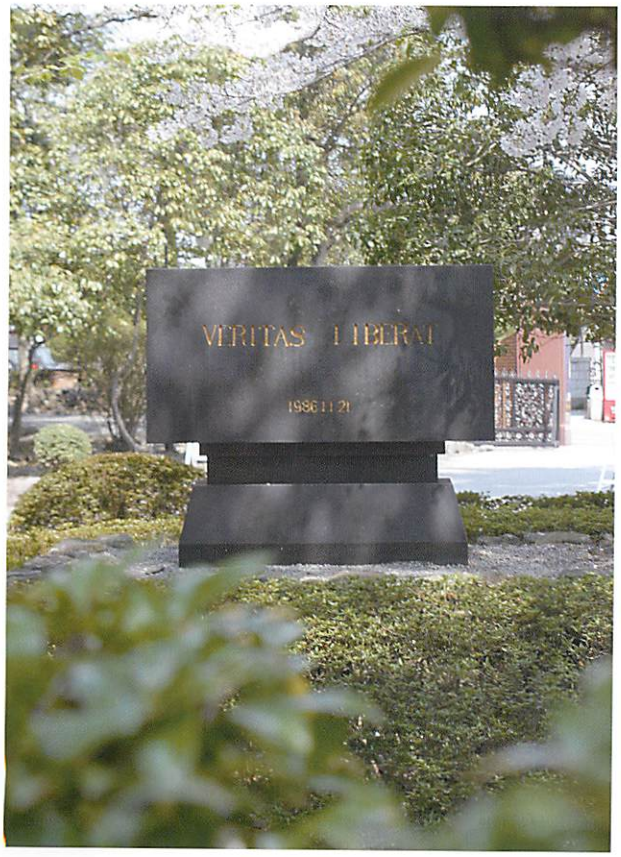
ARGONAUTES
別府大学図書館報

アルゴノートNo.51

CONTENTS

私の読書体験と、いくつかの教訓・アドバイス… 野村　文宏
「料理の本」から　世界に1冊のレシピ本へ… 立松　洋子
司書一年生として、そして社会人一年生として … 愛下　歩
ARGONAUTES（アルゴノート）について　… 吉岡　義信



私の読書体験と、いくつかの教訓・アドバイス

野　村　文　宏

私の心に残るいくつかの読書体験を紹介し、そこから読書についての教訓のようなものを引き出し、学生諸君を読書へと誘いかけることがこの文章の目的である。

まず、モンゴメリ『赤毛のアン』である。誰もが書名を聞いたことはあるだろう。私は当初この本を、女子生徒向けの、甘ったるい、読む価値のない本であると愚かにも思い込んでいた。大学院時代のある日、いつものように古書店で本を探索中、古ぼけたこの本の新潮文庫版が通路に落ちたまま捨て置かれていて、何気なく拾い上げ価格をみると「30円」の鉛筆書き。その非道なる扱いに哀れを感じ買い求めることにした。これが私と「アン」との出会いである。購入したからとてすぐに読むとは限らないのだが、そのときよほど暇であるか、何かから逃避したかったのだろう。下宿にてすぐに読み始めたところ、存外に面白く、直ちに読了し、『アンの青春』、『アンの愛情』と読み進める次第となった。さすがに良識ある私のこと、シリーズの3冊目か4冊目で思いとどまることを得たが、それはいま思い出しても非常に幸福な読書体験であった。想像力に満ちあふれているアンに、女性の魅力の一つの「かたち」を学んだように思う。いわば「アン」の分だけ私のストライクゾーンは拡大したのである。教訓：先入観をもたずに読んでみると、面白く読め、かつ読み手自身の在り方にも変化を与えてくれることがある。

次に、マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』。この本は冒頭のペンキ塗りのシーンだけを7～8回程読んだだろうか。つまりそこから先に進めない挫折の経験を繰り返した。ところが学部時代に、たぶん暇にすぎたのだろう、ふと再挑戦したところ、非常に面白く、続編の『ハックルベリー・フィンの冒険』まで一気に読んだ。感想としては「トムはいいやつ」。教訓：最初は面白く感じなくても、諦めずに読み進めると豊かな発見に至ることがある。

サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』。この本は姉がもっていた本で、私は17歳のときベッドに寝転んで読んだ。この本はおそらく、心に「青臭さ」をもつ者でなければ読めないと思う。読み手がもつ青臭さが主人公の青臭さと共鳴して、言語化困難な何ものかを読後に残す。一度読んで共感しておけば、青臭さから脱却した後も、過去のおのれの青臭さを思い出しつつ懐かしく読める。そして、過去の青臭くも美しい時代を思い出すこととなる。この意味で、音楽やマドレーヌの香りと同様、本には過去の記憶や感覚、感性をありありと保持し蘇らせてくれる機能があるように思う。私は今でも、あの日の、秋空の青さと窓から吹き込む風の涼感、読み進めたときの気持ちを思い出す。そしてちょっと泣きたいような気持ちになる。教訓：青臭くなければ読めない本があるから青臭いうちに読んでおこう。また、本には記憶を新鮮に保持し蘇らせる機能があり、ときに人をセンチメンタル・ジャーニーへと誘う。

司馬遼太郎『竜馬がいく』。これを私は20歳の頃読み、竜馬の人間的魅力と、社会を変えようとする幕末の志士たちの生き様に、同年代の若者として心を動かされ、自分も「世の中に対して何か大きなことをやってみたい」という身の程知らずの気宇壮大な野望を抱いたものだ。その後もちろん現実と折り合っていかねばならぬことを学んでいくのだが、若い時期に、野望に胸を躍らせることは若者の特権であると思う。教訓：若いときの野望は実現しにくいが、それでもやっぱり本を読み、刺激を受けて野望を抱こう。

デカルト『方法序説』。私にとってこれは読書の修行をさせてくれた本である。大学1年生の頃、法律の本の中にどうしても読めない本があった。それが佐藤幸治『日本国憲法』。友人達は問題なく読んでいるというのに、読書には多少の自信をもっていた私がこの本だけは読めなかった。これはいかんということで、修行の題材に選んだのが『方法序説』。この難しげな本を読むことで読書力

を鍛えようともくろんだのだ。短い本だが、注を読みつつ、線を引きながら行きつ戻りつして2週間ほどかけて3回読んだ。その後、『日本国憲法』を読んだところあっけなくすらすら読め、修行の成果に我ながら驚いた。それ以前の私の読書は、小説や物語、エッセイが中心で、概念を理解しつつ厳密に読み進めるという読書のスタイルが身についていなかったのだろう。それが、新しい種類の本を読むことで、新しい読書の仕方ができるようになったのだと思う。教訓：ジャンル違いの背伸びをした読書をすると、読書力が向上することがある。

最後に、ニーチェ『ツァラトゥストラ』。法律を学んでいた私は、この本を読んでニーチェの天才ぶりに驚き、かつ哲学がもつ力に憧れ、その結果哲学へと方向転換することになってしまった。いわば私にとって「転びの書」である。最近ようやく冷静に読めるようになったのだが、ニーチェの言葉に熱狂したことは懐かしい思い出である。そして30年近くたったいまでも、ニーチェの考え方は心の深奥に残っていて私の重要な部分を形作っているようだ。興味をもった者は、多くの訳があるから、自分の趣味にあったものを選べばよいが、私は手塚富雄訳が好きだ。やや擬古文調の歯切れのよいリズムが、ツァラトゥストラの言動に相応しいと思う。教訓：本はときに人間の中核を形成する一助となるが、人生を誤らせることもあるので気をつけよう。

あと、50冊ほど書きたいところだが、紙幅が尽きた。残る余白にいくつかのアドバイスを付け足しておこう。

外国の本の場合、自分にとって読みやすい翻訳に出会うと、楽しく読み進められることがある。読みにくさが、内容ではなく翻訳の日本語に起因することがあるのだ。最近新しい訳が続々と出ているので、試してみて欲しい。

古典を読んでみよう。プラトンの著作が2400年経た今でも読み継がれているのは、これまでの人々が「読む価値がある」と考えて大切に受け継いできたからであり、読む価値がなければとっくに散逸しているはずだ。その意味で、時間の試練を経ている書物には、何らかの価値がある可能性が高い。

興味があったらとにかく買ってみること。買っておかなければ、その後もう二度とその書名を思い出さず興味を抱かない場合が多い。興味がある本をすべて買うことはもちろん不可能であろうが、ときには身銭を切り自分の本棚に並べてみることも必要であると思う。

最後に、重要なこと。人に薦められたからといって、無理して読んではいけない。読もうとして面白くなければ、そこでいったん中止するのがよい。なぜならば、無理して読むとその本の印象を悪くしてしまい、本来実現されるべき幸福な出会いを台無しにしてしまうからだ。面白く読めなければ、まだその本は、自分にとって読むべき時期ではないのかもしれない。その意味で、読書には自分にとっての旬・タイミングがある。

私は、自分が読んできた本たちのことを思い返すとき、そこに「赤い糸」のようなものを感じる。出会うべくして出会い、読むべくして読んできた本たち。もちろん、それは、後知恵として、幾冊かの本を恣意的に選び出し、納得可能な仕方で結び合わせることで、私の読書を意味あるものとして解釈しようとする、知性の狡猾な企みにすぎないのだろう。それでも何か不思議な、運命のようなものを感じてしまうのだ。あと数冊、死ぬまでにそのような本に出会いたいと思う。

本は面白く、読む人を鍛えてくれる。そのことを私は実感し固く信じている。だから私はこれからも本を読み続けるし、学生諸君にも勇躍読書に挑戦し、その果実に触れて欲しいと心から願っている。

（食物栄養科学部　食物栄養学科准教授）

「料理の本」から　世界に１冊のレシピ本へ

立　松　洋　子

栄養士になることを目的として入学してくる別府大学短期大学部食物栄養科の学生たちには、料理が上手に作れる栄養士になれるように、授業では様々な調理実習の授業が組まれています。理論を勉強する「基礎調理」から専門的な和、洋、中華料理、地産食材を料理するアレンジ料理を学ぶ「調理実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」、「栄養教育論実習」では、赤ちゃんの離乳食から、幼児のおやつ、児童、生徒、成人、高齢者等の生活にあった食事、スポーツ選手のための食事等を、さらに、「臨床介護実習」では介護食（ソフト食、嚥下食）や病気の人の治療食（心臓病、糖尿病、脂質異常、腎臓病、肝臓病）などの実習に取り組んでいます。

食物栄養科に入学してくるからといって、料理が作れるわけでもありません。ましてや現在まで人の作ったものしか食べていない学生が、すぐに献立作成ができることなどありません。授業での学習を基本に、料理本の献立や、レシピ集などを参考にして、学生独自の献立を作るように努力していくしかありません。学生にとっては「料理の本」が第２の先生です。料理の本を積極的に活用し沢山の献立をたて、作った学生ほど様々な料理を作ることができるようになります。

私も学生と一緒で、いつも料理本と一緒に暮らしていると言っても過言ではありません。現在、料理のレシピの本は山のようにあります。例えば、ケーキ１つにしても40年前と違いいろいろな作り方があり、本当にこれで作ってもいいのかと感じるレシピもあります。やはり、昔の料理の本の方がしっかり理論や作り方を載せており、趣があるように感じます。

私は、仕事がら１つの食材で100種類ぐらいの料理を考えます。また、アレンジ料理を年間500ぐらい提案しています。多様な作り方を取り入れた創造性に富む料理を作るためには、料理の本は欠かせません。はやりの料理や古典的な料理などが詰まっている料理本は「宝の山」です。献立は、調理方法や材料の組み合わせを考えればすぐにいくらでもできるものですが、そこには、作る人の癖が出るものです。それで新しいイメージをもらうためには、様々なジャンルの料理の本を読むことになります。

今の学生は、インターネットでレシピを探すので、料理を考えさせるとほとんど同じレシピになっていることが多いようです。ところが、できたあがった料理は同じ物ができていないのです。作る人のセンスや調理工程や材料の扱いが違うと、レシピは同じでも出来上がった料理は差が出ています。授業でアレンジ料理を考えさせる場合は、イメージやポイントを少しづつ変えて一人一人の個性や特徴のでる料理になるように指導をしていきます。その際、全く違った料理が毎年100以上できます。学生の考えたレシピを学生の意図が生かされるように手直ししていますが、年々学生と年齢が離れるので、調理能力、創作力、思考力、応用力、奇抜生など差が大きくなり、料理ができるまでヤキモキしてしまうことが多くなりました。何とかできあがったときは、学生以上に達成感を感じています。

私が、学生時代に出会ったのが『豆腐百珍』という本です。天明２年（1782年）に出版された料理本で、100種の豆腐料理の調理方法を解説している本です。同じ材料でこれだけ多くの料理を考えた人がいると思うと感動します。この本のお陰で創作料理が好きになり、「献立は命」を信条にして、料理を作るように努めています。

食物栄養科では研究会活動も活発に行っています。学生たちは研究会に入ると、まずはどんな研究を２年間行うのかを考えます。そして、その計画に従って料理のレシピ本や食育に関する指導媒体を製作し、卒業していくことになります。学生たちは、先輩に負けないように、新しいアイデアで本を作ろうとします。今まで先輩の残した本や製作物を参考にし、似たような物を製作することの多い中、４年前になりますが、「飛び出すレシピ」（ページの中から立体的な絵がが飛び出す）

本や、「香りの絵本」を作ることになりました。このヒントになったのが、「**The Sweet Smell Of Christmas**」と言う絵本です。クリスマスを控えた熊さんの家族の楽しい出来事が英語で描かれています。その中に出てくるお料理やお菓子に香りがついているのです。ただ、匂いのシールが貼ってあるだけの物でした。学生たちは、この本に負けない「香りの絵本を」作りたいと熱心に話しあいました。香りのインクがあると言うことで調べると、1種類の香り30万円から50万円とのことでした。香りだけでは普通の絵本になってしまうことから、食育の絵本として、お母さんが読み聞かせをして子どもに食育を教えてあげられるページを作り、これらのページに春夏秋冬を感じる香りをつけることにしました。さらに、子どもに話し伝えることのできる食育豆知識のコーナーや、大分県の食材や出来事なども取り入れました。この本の製作費は200万円かかりましたが、学生にとってもまた、私にとっても忘れられない1冊となりました。

この本では、食べ物で作った春夏秋冬のお菓子の家の写真も一緒に掲載しました。春は、果物のゼリーで作った花畑を主とした春の風景、夏は、常夏の島をイメージし、涼しげなラングドシャで作った家とマジパンで作った海の風景を描いています。秋は、シホンケーキと食パンを薄くのばしドーム型に焼き上げたきのこ風の家と落ち葉を組み合わせ、冬の風景は、雪景色の中、クッキーで作った家にはろうそくの明かりを灯し、暖かい家庭のイメージを出しています。他には、「お菓子マジック」と言って、サラダやシチューやゼリー、ヨーグルトをアレンジした料理、お菓子で楽しく変化するお菓子の家を作った写真も掲載しています。

研究会では、「見て楽しい保育園のおやつレシピ」といって保育園の栄養士さんにアンケートで教えてもらった保育園のおやつを製作し、可愛いぬいぐるみと料理を一緒に写したレシピ集や、子どもたちにバランスの良い朝食を作ってもらうために、折り紙の食材をプレートに張ってもらうという食育教材も作成しました。また、卑弥呼から江戸時代までの和菓子の再現にも挑戦しましたが、料理に関する本には大変お世話になりました。あらゆるジャンルの料理本を活用しながら、自分たちで創作する料理の楽しさを学生が感じてくれることを願い、これからも学生と一緒に料理を作り、世界に一冊の料理レシピ集を作っていきたいと考えています。

（短期大学部　食物栄養科教授）

司書一年生として、そして社会人一年生として

くまもと森都心プラザ図書館司書
愛　下　　歩

私が司書になったのは、いくつかの偶然の結果だと言えるでしょう。現在働いている図書館の先輩方の中には、昔から図書館が好きで、学生時代には各地の図書館を巡っていた方もいるのですが、実を言うと、私の場合は図書館を利用すること自体があまりありませんでした。小学生や中学生の時分は、本自体をあまり読んでいませんでした。中学卒業後は、いわゆるライトノベルをたくさん読むようになったのですが、それらの本も、図書館で借りて読むことはありませんでした。気になった本はいつでも自分の手元に置いて読めるようにしておきたい質だったので、自ら買って読むことが基本だったのです。

そんな私が図書館を日常的に利用するようになったのは、大学に入学してからです。大学生になってからは、主に研究室活動で、自分の関心のあるテーマについて調べて発表する機会が増えました。最初の頃は自分の持っている本だけで調べていたのですが、当然ながらすぐに限界に達します。そこで図書館の本を利用するようになったのです。研究室活動で、私の発表の順番が巡って来るたびに、私は図書館へ通うようになりました。しかし、この頃になっても、私が大学卒業後に図書館で働くことになるだろうとは思っていませんでした。

そんな私に転機が訪れたのは４年生になってからです。いよいよ大学生最後の年を迎えた私は、周囲に流されるようにして就職活動を始めました。しかし、自分のやりたい事について、はっきりとしたビジョンを持っていたわけではありませんでしたから、どんな会社の採用試験を受ければよいかわかりません。まだ就活を始めたばかりだというのに、私は早くも壁にぶつかってしまったのです。そんな私のもとへとある話が舞い込んできます。１年生から３年生になるまで、毎年演習でお世話になっていた先生から、大学の図書館でボランティアをやってみないか、とお誘いを受けたのです。就活でも、また私生活の面でも壁を感じていた私は、とにかく新しいことにチャレンジしてみようとその誘いを受ける事にしました。そして、大学図書館での様々な方たちとの出会いをきっかけとして、私は図書館司書への道を踏み出すことになったのです。

私が卒業後勤めることになった「くまもと森都心プラザ図書館」は熊本市立図書館の系列に連なる施設です。熊本市には、熊本市立図書館、通称本館のほかに、植木、城南、とみあいの各図書館に加え、15の公民館図書室（うち１室は震災により閉鎖予定）や移動図書館車があり、プラザ図書館もその一つになります。

図書館で働き始めて一番最初に感じたことは、あたりまえのことかもしれませんが、大学の司書過程で学ぶことが図書館のすべてではないということです。大学で司書資格を得れば、それだけで一人前の司書が完成するわけではありません。司書資格を得るということは、一人前の司書になるためのスタートラインに過ぎないのです。図書館で働き始めるということも、一人前の司書になるための長い道のりの第一歩を踏み出すことにすぎません。ですから、私もその第一歩をようやく踏み出したものに過ぎないということになります。プラザ図書館で働き始めて、一人前の司書になるためには、大学で学んだこと以上の知識と、そして何より豊富な経験が必要なことを、いまさらながら思い知らされたのです。

司書として、そして社会人として、私は図書館で働き始めて様々なことを経験しました。充実感ややりがいだけでなく、苦労や自分の情けなさも経験しました。そしてこれからも、今までは想像もしなかったことを経験するに違いありません。ここからは、図書館で働き始めて経験した苦労話について少し書きたいと思います。

図書館というと、接遇に関しては他のサービス業に比べて緩いようにとらえる向きもあると思いますが、プラザ図書館は例外です。その理由はプラザ図書館の立地にあります。プラザ図書館は熊本駅の目の前にあり、そのため県外の方も訪れます。また、さすがに数は多くないのですが、海外から来日した観光客の方もいらっしゃいます。つまり、私たちは県外や海外からいらした方に対し

て、熊本県の代表の一人として接しているといっても過言ではないのです。熊本へ観光にやってきた方々が、熊本に良い印象を持つか、それとも悪い印象を持つか、それは私たちの接遇にもかかっているのです。そのため、プラザ図書館では、図書館を利用する方々のことを「利用者」「来館者」と呼ぶことはありません。基本的に「お客さま」と呼びます。また、図書館へやってきたお客様に対するあいさつは「いらっしゃいませ」になります。お客さまに接しているときは笑顔を絶やさないことも大事です。お辞儀をするときは、おなかの高さで左手を右手の上に重ね、腰だけをきれいにまげて低頭します。首が曲がってはいけません。勤務中の服装も私服にエプロンではありません。ズボンは黒か濃紺以外は不可、シャツは白で無地のもの、その上からベストを着用します。男性はクールビズの期間中以外はネクタイをしめるのも忘れずに。

この接遇の厳しさは本当に大変です。私の場合は接客業でバイトした経験がありませんでしたから、なおのことでした。最初のころは、お客様を前にすると緊張のあまり笑顔が出ません。お辞儀をするとどうしても首も一緒に曲がってしまいます。もともと猫背なので歩くときや座ったときの姿勢も悪い。接遇に関して注意されたことは一度や二度ではありませんでした。今では少しずつ改善されてきていると思うのですが、猫背は今でも私の課題の一つだったりします。

接遇でもいろいろと苦労していますが、一番苦手で苦労しているのは利用者登録です。新規のお客さまが本を借りるときはもちろんカードの作成が必要です。カードを発行するときは、申込書にお客さまの氏名、生年月日、郵便番号、住所、電話番号などを記入していただき、それらの情報をパソコンに入力します。お客さまに書いていただいた情報を入力するだけなのですが、これがなかなか難しいのです。初めてのころは、必ずどこかに入力ミスがありました。他にも氏名の読み仮名が未記入であることに気づかないままカードを発行してしまったこともありました。申込用紙は熊本市の公文書なので、必要事項をすべて書いていただかないままカードを発行するのは大問題です。そのときは、お客さまに電話して次回来館されたときに記入していただくようお願いしました。今でも、利用者登録をやるときはドキドキしますし、いまだにどこかにミスがあることもあります。

業務上の苦労以上に、司書として以前に社会人として経験の乏しい未熟者として、いろいろな失敗もしました。必ずしも自分だけに責任があるわけではないミスでも、些細な行き違いや誤解からお客さまの信用を失ってしまうことも経験しました。弁解しようとしてもますますお客様の気分を害してしまうだけなので、自分の言い分を話すことすらできません。そして、一度失われた信用は簡単には戻らないのです。そのような経験をしたときは、とても落ち込みました。そして、お客さまに接することが怖くなったりもしました。しかし、図書館で働いている以上、お客さまに接しないで仕事をすることはできません。毎日カウンター業務に入って、お客さまに接しないといけません。しかし、その恐怖心も一緒に働く人たちの励ましや、時間が解決してくれました。

長々と苦労話を書いてしまいましたが、もちろん、図書館で働くことは嫌なことばかりあではありません。お客様の中には結構フレンドリーに接してくださる方もいて、そのような方の対応をしていると、こちらも暖かい気分になります。ある日、お客さまから「対応がいいね」と言われたときは感動すら覚えました。貸し出しの時に「ありがとう」と一言言っていただくだけでも、とてもうれしい気分になります。あいさつに返事をしてくださるだけでも励みになります。

最後に、図書館で働いてみて、こうだった、ああだった、という総括で終わりを迎えたいところではありますが、残念ながら司書としての経験が1年にも満たない私には、図書館での仕事を総括できるだけの知識と経験はとてもありません。そのような総括ができるようになる時が来るとすれば、それはきっと何十年ものちの話になるでしょう。ですから、この文章のおしまいは図書館で働くことの総括ではなく、今後の展望や希望で締めくくりたいと思います。司書一年生として、そして社会人一年生として、まだまだ経験が足りず、焦ってばかりで、失敗続きの私ですが、うれしいことに私の仕事に対する姿勢を評価してくださる方もいます。まずは、その方々の期待に応えるように、そして、私の仕事に対する姿勢を評価してくださる方がもっと増えるように、図書館での仕事を頑張りたいと思います。

（史学・文化財学科　2016年3月卒業）

ARGONAUTES（アルゴノート）について

吉　岡　義　信

図書館報 ARGONAUTES（アルゴノート）は、1978 年に第 1 号が刊行され 1996 年の第 46 号をもって休刊していました。その後、2013 年 3 月に第 47 号が再刊され、2016 年 3 月に第 50 号を迎えました。

この間、2004 年春に「ARGONAUTES on Web」が図書館のホームページ上に掲載され、2007 年秋まで 15 号を数えました。佐藤允昭館長による発刊のことばには「インターネット上に図書館報 " アルゴノート " の再現を試みようとするものです。（中略）情報を一方的に発信するのではなく、利用者である学生・教職員と図書館の情報交流の場にしたいと思っています。」とあります。これには 2006 年 Spring の No.9 まで中国語版、韓国語版もありました。

続いて 2008 年 12 月に「ARGONAUTES かわら版」の第 1 号が発行されました。石井保廣館長は巻頭言で「附属図書館では、従前から図書館報として、「ARGONAUTES on Web」で広報してきましたが、必ずしも学生の皆さん、先生方に浸透するまでに至らなかったようです。できる限り多くの方に図書館のサービスや現状について、手にとって読んでいただけるようリーフレット形式で配布することにいたしました」と述べています。これは 2014 年 1 月の第 14 号まで続きました。

アルゴノート

ARGONAUTES

発刊のことば

「アルゴノート」の名称は、第 1 号に当時の林章館長の「発刊のことば」としてギリシア神話のアルゴ船の冒険物語から、「アルゴナウテースとはこのアルゴ船の乗組員をさす言葉で、彼らの行手には様々の冒険が待ち受けますが、神々の助けを借りながらも幾多の苦難を乗りこえて見事目的を達します。図書館もまた困難を乗りこえて立派な大学付属図書館に育つにはまことにふさわしい、そう思いましたのでこの記念すべきアルゴノートをと襲名させていただくことにしました。」とあります。（詳細は第 1 号をご覧いただきたい）

この「アルゴノート」という名称は「発刊のことば」にもあるように、図書館報以前に学園通信としてありました。1966 年に「別府大学ニュース・アルゴノート」として創刊され、第 7 号から「アルゴノート・別府大学通信」と改称、1968 年の第 9 号をもって休刊となりました。紆余曲折の後、「別府大学通信」から今日の「Be- News」へと続いています。（この間の経緯は『学校法人佐藤学園の八十年』に述べられています。）

では、別府大学通信としての「アルゴノート」という名称がどうして付けられたのか。残念ながら「別府大学ニュース・アルゴノート」にはこのことに触れられていません。ただ創立者の佐藤義詮先生は西洋古典に造詣が深かったこともあり、その理由の一つとして考えられなくもありません。

もう一つ昨年秋、大分県立図書館に所蔵されているのを見つけ出したのですが、「アルゴノオト」という雑誌が大田眞夫氏（編集兼発行人）により昭和５年に創刊されており、佐藤義詮先生が創刊号の編集後記を書いていることから、編集に携わっていたことは間違いないようです。このことから推測ですがこの「アルゴノオト」に特別な思い入れがあったのかもしれません。

この「アルゴノオト」は創刊号から第３号まで県立図書館に所蔵されているだけで国会図書館にも所蔵されておらず実際何号まで刊行されたのか不明です。

ちなみに創刊号から３号まで目次によりその内容を見てみると以下のようになります。

創刊号（昭和5年4月5日発行　東京　山陽堂書店）

詩人	竹友　藻風
パアドレ・バザリオ	佐藤　義詮
希臘詩抄	大田　眞夫
第七號地下室（ケッセル）	佐々　信吉
近代美術とその哲學（ヒューム）	亞井　植夫
編輯後記	
表紙・扉	ヴエラ・ウイロウビイ
カット	中川郷一郎

第２号（昭和5年6月1日　東京　山陽堂書店）

牧歌	竹友　藻風
家そだち（ペイタア）	大田　眞夫
無題	石濱　金作
イリヤ氏の意見	佐藤　義詮
水晶の夫・青銅の妻（デユベルノア）	中込　純次
詩人（二）	竹友　藻風
千葉明氏個展と渡歐後援畫會	赤城　泰舒

第３号（昭和5年7月15日発行　東京「アルゴノート」発行所）

LITTLE LADIES THREE	SOFU
戀さまざま（スタンダル）	佐々　信吉
詩二篇	亞井　植夫
詩集『機械』から（ブラツク）	新居　格
摩耶（ガンチヨン）	大河原　元
追憶	佐藤　義詮
近代美術とその哲學（ヒユウム）	亞井　植夫

これらの人物の中で調査した結果、経歴が判明したのは、竹友藻風（たけとも　そうふう）英文学者、詩人。石浜金作（いしはま　きんさく）小説家。中込純次（なかごめ　じゅんじ）詩人。赤城泰舒（あかぎ　やすのぶ）洋画家。新居格（にい　いたる）評論家。の５名で、全員が何等かのかたちで文化学院と関わりがあることがわかりました。「アルゴノオト」が創刊された昭和５年当時、『浪漫はるかに―佐藤義詮の生涯―』の年譜によると、佐藤義詮先生は前年に文化学院を卒業し東京に在京していることになっており、「アルゴノオト」が文化学院関係者と何等かの関連性があるのかもしれません。引き続き調査していきたい。

追記、「アルゴノオト」のコピーを山本晴樹教授に差し上げたところ、『愛と反逆―文化学院の五十年―』に「アルゴノオト」のことが記載されているとのご教示をいただき、その図書を貸してくれました。調べてみると中込純次氏の「おもいでの絲―文化学院と同人誌―」という一文があり、その中に「同じく四月に佐藤を中心に「アルゴノート」が出た。私はアンリ・デュヴェルノワの一幕物の翻訳を出し、佐藤はいつもの通り哲学的論文を書いている。私はそれをパリで受け取った。佐藤についていうと、彼は昭和十一年に『希臘古代詩序説』を、柳田学の『モンパルノ』といっしょに第三書院から出版した。」とありました。また、これと同じ内容の文章が同氏の『文学に現れたパリ』（1978 年　三笠書房）に掲載されていることも判明しました。（図書館に所蔵）

（附属図書館事務部次長）

［発行］　別府大学附属図書館　〒 874-8501 別府市大字北石垣 82　TEL 0977-66-9633　FAX 0977-66-9632
別府大学附属図書館ホームページ http://www.beppu-u.ac.jp/library/　携帯版 OPAC（蔵書検索）http://lib-opac.beppu-u.ac.jp/mobileopac